❖ 最高の至福——解脱

◉——特殊なチャクラ——サハスラーラ

ここまで読み進められてきて、七つのチャクラのうち、どうも一つだけ異質なチャクラがあることに、気付いた方も多いのではないだろうか。

そう、それは七番目のサハスラーラ・チャクラである。

このサハスラーラ・チャクラは、他の六つのチャクラとは異なり、わたしたちをこの肉体から解放するためのセンターとなっている。

つまり、この千の蓮華のチャクラは、チャクラではなく、わたしたちの意識をそこから抜き出し、高い世界へと至らしめるための門の役割を果たしている、ということなのだ。それゆえ、「解放の門」ともいわれる。

この段階にまで——つまり頭頂にまで——エネルギーが満ちてくると、それまでの六つのチャクラが司ってきた現世的能力や神秘力といったものも、すべて超越することになる。

そして、エネルギーがサハスラーラから完全に撤退することによって、すべてのチャクラの制

約から解き放たれ、わたしたちは解脱することになるのである。

◉——解脱とは？

ここで、わたしたちは、ついに「解脱」というキーワードにたどり着いた。

では、この解脱とは一体何だろうか？

「解脱」とは、一言で言うと、様々な苦しみ・束縛から解放されて自由になることである。

仏教の聖典の言葉であるパーリ語では、解脱のことを「mutti（ムッティ）」という。この言葉には「束縛からの解放」という意味がある。

このことから、一口に「解脱」と言っても、どのような束縛から解放されるのかによって段階がある、ということになる。

例えば、この人間界から離脱することも解脱だし、現象界、すなわち六道輪廻（ろくどうりんね）の世界から離脱することも解脱に当たる。もちろん、アストラル世界から離脱することも解脱である。

つまり、解脱とは、あらゆる世界や煩悩から離れることを意味しているのだ。

そして、その解脱を繰り返し、最終的にコーザル世界からも離脱すること、これこそが最終段階の解脱なのである。

それまでの解脱が、まだ三界の中にとどまる形でなされるものであるのに対し、この最終段階の解脱は、三界全体から離脱することを意味している。

る（ここでは、この離解脱も含めて「解脱」という言葉が当てられているため、「離解脱」という言葉を使わせていただく）。

このときには、当然ながらわたしたちの煩悩はすべて滅尽されている。

では、なぜこの解脱が素晴らしいのだろうか？――それは、解脱が、わたしたち人類が求めてやまなかったものを、与えてくれるからにほかならない。

◉――人間が求めてやまないもの（1）――不老不死

古来、人間は不老不死を求めてやまなかった。

紀元前三世紀に初めて中国全土を統一した秦の始皇帝が、不老不死の仙薬を探し求めたという話は有名である。

これは何を意味しているかというと、人間は、この世であらん限りの幸福を手に入れたとして、最後に残るのが不老不死への願望だということだ。

しかし、大国の覇権を手中に収め、栄耀栄華を極めた始皇帝でさえ、こればかりは手に入れることができなかった。死という運命から逃れることは、できなかったのである。

では、なぜできなかったのか？――それは、この世が無常の法則のもとにあるからにほかならない。

無常とは、この世の一切のものは変化する、生じたものは必ず滅するということである。そして、わたしたち人間には、老・病・死という運命が待ち受けている。これを避けることはできない。

これは、人間よりも高い生命体である神々とて同じである。

すべての世界には寿命というものがあり、たとえその期間がどんなに長いとしても、始めと終わりを考えるなら、それは無常なのだ。

しかし、解脱に到達するならば、無常の三界から完全に離脱し、常の世界――すなわち、わたしたちの魂本来の姿である「真我独存位」――に立ち戻ることになるため、念願の不老不死の境地を手にすることができるのである。

◉――人間が求めてやまないもの（2）――安定した喜び（幸福）

もう一つ、人間が求めてやまないものがある。それは、安定した喜び（幸福）である。

わたしたちが三界にとどまる限り、どんなに大きな喜びを手に入れたとしても、いずれはそれ

を手放さなくてはならない日がやってくる。

例えば、念願の異性と相思相愛になり、最高の喜びに浸ることができたとしても、その異性が心変わりを起こし、他の同性へとなびいてしまったなら、そこでの幸福は一瞬にして崩壊してしまうだろう。

例えば、異性の顔形の美しさに惹かれて一緒になったとして、その対象が若さを保っているうちは、それを目にすることで喜びに浸ることができるが、老いによって、あるいはケガ等によって美しさが損なわれると、その喜びも消え去ってしまう。

特に、すべての生命体に訪れる「死」は、大きな節目となる。なぜなら、わたしたちは死に際して、それまでに手に入れたもの（喜びや幸福）を、すべて手放さなくてはならなくなるからだ。

そのときには、それまでに経験した喜びが強ければ強いほど、そして、その喜びに心がとらわれていればとらわれているほど、大きな苦しみを経験しなければならない。

このように、三界に存在する一切のものは「無常」という変化にさらされており、一時も同じ状態で留まることがない。それゆえ、生じた喜びも、いずれは崩れ去ってしまう運命にある。

すなわち、この三界に存在する喜びは、不安定な喜びなのだ。

しかし、解脱が与えてくれる喜びというのは、そうではなく、安定した喜びなのである。なぜ

なら、わたしたちの真我にもともと備わっているものが発現してくるため、その喜びは、外的な変化に全く影響されないからだ。

そういう意味で、解脱の喜びというものは、三界に存在する喜びをはるかに凌駕しているのである。

◉――究極の真理！――真我独存位

わたしたちが解脱し、真我の独存位に至ったときに得られるものについて、もう少し言及しておきたい。

ここでいう「独存位」というのは、真我はこの三界には存在しておらず、マハー・ニルヴァーナに没入しているという意味である。

独存位となった真我には、次の三つの特性が備わっている。

（1）絶対自由
（2）絶対幸福
（3）絶対歓喜

絶対自由とは、現象界・アストラル世界・コーザル世界の三つの世界に対して、自在に身体をつくり、現われることもでき、また、そこからまた元の世界（マハー・ニルヴァーナ）に戻ることもできる状態である。

これはすなわち、生の自由を意味し、死の自由を意味する。

絶対幸福とは、真理の法則そのものをすべて体得しているがゆえに、不幸が全くない状態、一切苦しみが生起しない状態である。

絶対歓喜とは、わたしたちの内側に存在している善法、徳が増大することにより、わたしたちが行為を行なうことなく、身体が絶えず歓喜の状態でいられる、ということである。

ここで「絶対」という言葉が頭に付いているのは、先程も述べたように、外的な変化に影響されないということを表わしている。つまり、この三つの様態は不変不滅なのである。

そして、この真我独存位こそが究極の真理であり、霊的進化の最終地点でもあるのだ。そのために、クンダリニーを覚醒させ、チャクラを開発し、霊性を向上させていくのである。

《体験談》　光の空間――心には完全なる寂静が生じた

ソーパーカ師　成就者

そのとき、ものすごい解放感とともに、自分の心身がどんどん軽くなって、静かに上昇を始めた。そして、はるか上方に太陽のような光の球体があることに気付いた。

そこに向かって自分が上昇していくと同時に、透明な光がシャワーのように降り注がれ、自分自身のナーディー（※体内に張り巡らされているエネルギーを通すための管、気道）が浄化されていくのを感じた。

そして最終的に光の中に飛び込んだとき、そこには光の空間しかなく、心に完全なる寂静（じゃくせい）が生じた。

それは、人間では絶対に経験できない喜びだった。〝突き抜けた喜び〟と言ったらいいだろうか。意識が一次元高いところにポーンと行ってしまっている感じだ。

そのときに、「ああ、すべての魂がこの喜びを経験してくれたらいいな」という思いが自然にわき起こってきた。それは、本当に自然と心の底からわき起こってくるものだった。

《体験談》　一切の苦しみは滅尽し、大平安と大歓喜のみが存在していた

ダンマサヴァ師　成就者

深い瞑想に入っていくと、呼吸そのものが次第に煩わしくなっていく。「もう呼吸するのはやめよ

う」と思った。そして呼吸をやめた。

途端に完全な集中が訪れ、意識はグーッと内奥へと突っ込んでいった。そのときの集中は、特に何もしなくても自然と集中している状態だった。

突如、目の前に光が広がった。辺り一面が光の海だ。光の海に没入した状態で、さらに瞑想状態に変化が訪れる。その「光の世界」と「自分」がはっきりと分離されたのだ。

そのときの「自分」――これはもう言葉では表現できないが――これこそが「ニルヴァーナ」と呼ばれる、魂の究極の境地のようだった。

そのとき、魂は、すべての情報から解放されたのである。一切の苦しみは滅尽し、完全な集中から来る大平安・大歓喜のみが存在していた――。

❖「縁起の法」はクンダリニーのプロセスだった

◉――魂の落下のプロセス――十二縁起の法

ところで、お釈迦様が残された教えに「十二縁起の法（十二の条件生起の段階）」というものがある。

これは、お釈迦様が初転法輪にて――すなわち、菩提樹の下で解脱を果たされたのち、かつて苦行を共にしていた五人の修行仲間に対して、初めて法則をお説きになったわけだが、その際に――明かされた法則の一つとされている。

以下の十二のプロセスがそれだ。

（1）無明（非神秘力）
（2）行（経験の構成）
（3）識（識別）
（4）名色（心の要素・形状・容姿）

（5）六処（六つの感覚要素と対象）
（6）触（接触）
（7）受（感覚）
（8）愛（渇愛）
（9）取（とらわれ）
（10）有（生存）
（11）生（出生）
（12）苦（苦しみ）

この十二縁起は、真我が三グナに干渉されて、独存位の状態からコーザル世界へ、コーザル世界からアストラル世界へ、そしてアストラル世界から現象界へと、次々と世界を創造しながら落下してきた流れを表わしたものである。

これらのうち、「無明」から「識」までがコーザル世界に、「名色」から「有」までがアストラル世界に、そして「生」と「苦」が現象界に対応する。

今のわたしたちは、（11）の「生」によってこの人間界に生まれ、（12）の「苦」によって様々な苦しみを経験している――この段階に当たるわけだ。

ちなみに、三グナというのは、サットヴァ（善性）・ラジャス（動性）・タマス（暗性）の三つのエネルギーのことで、それぞれ、仏教にいう貪（愛著）・瞋（邪悪心）・癡（迷妄）の根本煩悩に対応している。

つまり、原初の状態では真我と三グナしか存在しておらず、両者の接触によってこの大宇宙が生み出されたというのが、宇宙創成にまつわるヨーガの考え方なのである。

◉――魂の上昇のプロセス――苦から解脱に至る過程

お釈迦様は、前項で述べた魂の落下のプロセスだけではなく、ちゃんと元の世界に戻るプロセス、すなわち上昇のプロセスも説いていた。

それが、以下の「苦から解脱に至る過程」である（※仏典では「信」の次に「悦」が来ているが、その間に「クンダリニーの覚醒」が入る）。

これぞまさに、進化の道程とも言うべき「クンダリニーのプロセス」にほかならない。

（1）苦（苦しみ）
（2）信

（3）クンダリニーの覚醒
（4）悦（歓喜）
（5）喜
（6）軽安（静寂）
（7）楽
（8）三昧（サマディ）
（9）如実智見（如実精通見解）
（10）遠離（現世否定）
（11）離貪（離愛著）
（12）解脱（離解脱）

第一章では、クンダリニーの本覚醒までのプロセスを詳しく説明したわけだが、クンダリニーの上昇に伴うえもいわれぬ快感が「悦」に当たり、それ以降、「喜」「軽安」「楽」「三昧」「如実智見」「遠離」「離貪」という流れを経て「解脱」に至るというわけだ。

各段階の詳しい内容については第六章で取り上げるので、ここでは、一通りの流れを簡単に説明するだけに留めておくことにしよう。

まず、解脱に向けての第一条件は、人生を「苦」と感じることである。苦を感じると、解脱したいという強い思いが生じる。これが信仰――すなわち「信」――だ。

そして修行に入り「クンダリニーが覚醒」する。覚醒したクンダリニーがスシュムナー管を上昇するときに、「悦」が生じる。それがサハスラーラ・チャクラに到達すると、〝不死の甘露〟が滴るようになる。

不死の甘露は「ネクター」とも「ビンドゥ」とも呼ばれているもので、心を歓喜状態にする。このエネルギーの循環（クンダリニーの上昇と不死の甘露の落下）――これをツァンダリーといっているが――が繰り返される中で、「喜」が生じる。これは、この上ない満足感である。喜が生じると、「軽安」が生じる。これは、満足した心が、肉体的に素晴らしい影響を与える状態だ。

そして、軽安の次に「楽」が生じる。喜の〝満足〟に対して、この楽は〝安定〟である。ものすごいエネルギーを持っている。この段階では、外界の刺激に反応しなくなる。

そして、精神的にも肉体的にも楽で満たされると、強い精神集中を得ることができる。それによって「三昧」に入る。

ちなみに、この「三昧」の段階で、わたしたちは六ヨーガのうちの、「意識を移し替えるヨーガ」を除く五つのヨーガを経験することになる。六ヨーガとは、以下のとおりだ（※これについ

ても、第六章で詳しく取り上げる）。

（1）熱のヨーガ
（2）バルドのヨーガ
（3）夢見のヨーガ
（4）幻身のヨーガ
（5）光のヨーガ
（6）意識を移し替えるヨーガ

三昧によってすべてのことを完全に知ることができる。これを「如実智見」という。すべてのことが理解できたとき、この世が幻影だと悟り「遠離」する。遠離すると「離貪」する。離貪することによって「解脱」するのである。

コラム Column

チャクラとクンダリニーの開発によって煩悩から解放される

第二章で、普通の状態ではチャクラは煩悩的な心の働きを司っている、と述べた。

しかし、クンダリニーが覚醒し、下位のチャクラからどんどん解放していった場合、わたしたちの煩悩は次々と止滅（しめつ）――つまり、止まり滅されていくことになる。

そのとき、煩悩のエネルギーはどんどん昇華され、スシュムナー管を上昇していく。そして頭頂に至ったのちにツァンダリーが起こり、体内で循環を始めるようになるのである。

それによって、わたしたちはあらゆるストレスから解放され、煩悩を満たさなくても、いつも幸福な状態に浸っていられるようになるのだ。

体験談

煩悩のエネルギーが即昇華され、至福へ

サハスラーラまでのエネルギーの道筋がある程度確定してからは、「煩悩の生起即エネルギーの上昇、頭頂からの至福」というプロセスを経験しやすくなりました。

カルマを受けても、その粗雑なエネルギーがすぐに昇華して、頭頂からの至福に変わる、というプロセスを経験するようになったのです。それによって心の自由度や解放感が大きくなり、苦悩が激減しました。

集中修行に入ったときは、甘露が体内を

満たすようになって、全身が微細な粒子のようになる感覚を経験したり、全身が海のようになる感覚を経験したりしました。

（Aさん　出家者）

体験談

クンダリニーの上昇で性欲を昇華

性欲のヴィジョンが見えたので、それに集中してマントラを唱えたら、そのヴィジョンがガラスが崩れるようにバラバラになりました。

そして、クンダリニーがスヴァディスターナ・チャクラを抜けてスーッとマニプーラ・チャクラまで上がった状態になったとき、性欲を出そうと思っても出てきませんでした。

（大阪　Oさん　男性　四十代）

体験談

チャクラの浄化によって疲れ知らずに

（ヴァジラハーサ師　成就者）

甘露が落ちて各チャクラが浄化されていくと、そこからのエネルギーの漏れというものがなくなっていきます。もちろん、その前の段階で、チャクラの漏れというものは、だいぶなくなってきてはいますが……。

甘露によってチャクラが微細に振動し、至福が生じるようになります。チャクラが本当に浄化されていくのが実感できるのです。より微細なエネルギーが広がっていく、と言ってもいいでしょう。

要するに、各チャクラのけがれによって、いろいろなエネルギーの消耗（漏れ）

があるわけですが、それがなくなっていくにつれて、今度は内側が充実していくことになるわけです。

それによって、疲れることなく修行を長時間することが可能になります。なぜなら、疲れるというのは、エネルギーの消耗が原因ですから。

❖ すべてはクンダリニーの覚醒から

これまで見てきたように、能力開発から神秘力の開発、そして解脱に至るまで、チャクラとクンダリニーがわたしたちに与えてくれる恩恵には、計り知れないものがある。

わたしたちが今生どのプロセスまで修行を進めるかにもよるが、本気で頑張るなら、今生充実した人生が約束されるだけでなく、来世以降も、わたしたちをこの人間世界からより高い世界へ——今のわたしたちには想像もつかないような、長寿と喜びに満ちあふれた世界へ——といざなってくれるのである。

これだけでも、いかに大きな恩恵が得られるかが、おわかりいただけるのではないだろうか。

ましてや、最終の解脱に到達するなら、こうした神々の喜びですら足元にも及ばないほどの素晴らしい境地に、永遠に浸り続けることができるというのだから、驚き以外の何ものでもない。

そこには、絶対的な自由・幸福・歓喜があるのだ。

いずれにせよ、こうした至福の道を切り開く端緒（たんしょ）となるのが、クンダリニーを覚醒することなのである。これなしには始まらない。

◉——困難で危険を伴う覚醒

ところが、本来、このクンダリニーを覚醒させることは非常に難しい。ヨーガの本場インドでさえ、一生懸命修行しても、覚醒までに最短で五年はかかるとされている。

いや、五年かかったとしても、覚醒すればいい。一生覚醒しない人も非常に多いのだ。

それだけではない。クンダリニーの覚醒には大変な〝危険〟が伴う。

クンダリニーは、人間を神以上の存在へと進化させるだけのエネルギーであるから、そのパワーたるや極めて強烈である。

だから、もし難行苦行の上にようやく覚醒に成功したとしても、そのすさまじいパワーに振り回されて、心身共に異常を来たし、時には廃人になってしまう危険性すらあるのである。

・間違った経路を伝わってクンダリニーが上がったり、あまりにも急激に動き始めたりすると、いろいろな形で発狂したり、ノイローゼになったり、あるいは治療しにくい神経的あるいは精神的苦痛に悩まされたりするようになる場合がある。……きわめて深刻な影響が出てくる。つまり、めまいがしたり、感覚を喪失したり、興奮しやすく短気になったり、極端な場合、精神錯乱あるいは全身麻痺を起こして死んでしまうこともある。

・あなたの頭の中の無意識の領域に、突然膨大な量のエネルギーがドッと流れ込んでくるようすを、あなたは一体想像することができるだろうか。そのような状態が、まさにクンダリニーの覚醒によって現実に引き起こされるのである。……準備なしにクンダリニーを解き放つことは、中から出てくるものを処する力なしにパンドラの箱を開けるようなものである。

（ゴーピ・クリシュナ）

・クンダリニーの上昇には非常な危険が伴うもので、偶発的に、あるいは時期尚早にもかかわらずクンダリニーを上昇させてしまった人に降りかかる危険の重大さはどんなに誇張しても誇張しすぎることは決してない。……勝手にクンダリニーを弄ぶと、クンダリニーが勝手に動き、その結果の苦痛をしばしばもたらしたり、肉体の細胞組織が容易に破れたり、はては肉体の死に至ることさえおきる。

（スワミ・ラーマ）

・クンダリニーを間違って目醒めさせると、それは恐ろしい破壊力となって現われ、他人を傷つけると同時に、自身の一生をも破滅に導く結果となるのである。……或る人々は、其のために精神分裂を起したり、また狂想状態の人間と変わるものさえある。

（関口野薔薇）

（以上引用文献／『クンダリニー』（平河出版社）／『クンダリニーとは何か』（めるくまーる社）／『神智学大要1』（たま出版）／『ヨガ行法中伝』（霞ヶ関書房））

《体験談》でたらめな実践を教えられて精神病院通いに

（Nさん　女性）

わたしは以前、とある宗教に属しており、そこでクンダリニーの覚醒法を教えられました。早速実行してみると、確かにクンダリニーは覚醒したものの、精神の方が分裂気味に。言うことは支離滅裂、行動もちぐはぐになり、結局、精神病院への通院を余儀なくされてしまったのです。ALEPHと違い、その宗教では、そんなわたしに対してアフターケアも何もしてくれず、放置状態でした。今となっては、そのクンダリニーの覚醒法は、でたらめで危険なものであったとしか言いようがありません。

《体験談》自己流の修行でクモ膜下出血や魔境を体験

（Kさん　男性）

独学ながら、ある程度の瞑想経験があったわたしは、自力でのクンダリニーの覚醒に成功しました。

しかし、クンダリニーというものは、覚醒すればそれでいいというものではありません。わたしの場合、少し左にずれて覚醒してしまい、その結果が突然のクモ膜下出血。わたしは倒れて病院に運ばれました。

病院では原因がわからないままに手術をした結果、頭頂が陥没していることがわかりました。後にＡＬＥＰＨの成就者から受けた説明によれば、これはクンダリニーがあまりにも急に上がって、頭蓋骨を骨折させたためだということです。

さらにその後、「多額の生命保険に入って自殺しろ」という、幻聴のようなささやきが聞こえてきました。わたしはすっかりその気になり、一億円の生命保険に入りました。

そして、その一カ月後、「飛び込め、飛び込め！死んだ方が楽だ」と耳元でささやく声に従って、ハンドルも切らずブレーキもかけずに、自動車ごとダムに飛び込んだのでした。

幸いにも浅い所に車が落ちたので、わたしはシートベルトを外して車外へ出ました。その瞬間から、夢から覚めたかのように魔境から抜け出すことができました。

その後わたしは自己流の修行をやめ、ＡＬＥＰＨに入会してセミナー等に参加するまでになりました。おかげさまで、今では元気に修行に励んでいます。

❖ クンダリニーを安全かつ速やかに覚醒させるために

◉――霊的指導者が欠かせない

このように、長い時間を要し、また、大変な危険が伴うクンダリニーの覚醒だが、安全に行なう方法が一つだけ存在する。

それは、既にクンダリニーの覚醒を経験した適切な指導者の指導のもとで、修行することだ。

・多くの著者が、クンダリニー・ヨーガは危険な道程であると書いている。しかし、これは、たとえば熟練者の指導を受けずに車を乗り回そうとする場合でも同じことが言えるはずである。そこでクンダリニーを覚醒させるもっとも安全で、もっともすぐれた方法は、クンダリニーに精通したグルの祝福を受けることである。

たとえどんな方法でシャクティ（クンダリニー）が目醒めるにしても、この道に関するかぎり、グルの祝福は絶対に必要である。

（ヨーギ・アムリタ・デーサイ）

・真摯な心をもった求道者に対して、私は、まず正統の資格をもった指導者につき、そしてその指導者のもとで伝統的な形でタントラ教典を学び、その後で初めてクンダリニーを覚醒させるための実践を始めることを勧めたい。

（スワミ・ラーマ）

・では、ごく普通の知識をもってクンダリニーを見つけ出すには、探求者は一体どうすればよいのだろうか。それはひとえに師を見つけること……。

（スワミ・シヴァナンダ・ラダ）

・大師または経験豊かな先輩密教家の指導、監視がない限り、仮にもそのような試み（クンダリニー覚醒と上昇）など決してしないように厳重な警告を発する次第である。

（A・E・パウエル）

・クンダリニーを覚醒させる為には、良き師を選んで其の指導を受ける必要があるのである。……実際上の行法を修得しようと思う人は、書物によらず、『生きた人間』としての大師を先ず求むべきである。

◉――覚醒を手助けするイニシエーション

しかし、指導者がいたとしても、それだけで速やかにクンダリニーが覚醒するかといえば、そうとも言い切れない。

先程述べたように、本場インドでさえ、クンダリニーの覚醒は至難の業。しかも、それは数年、数十年もこつこつと修行した結果、ようやく覚醒する「人もいる」というレベルなのである。

安全に覚醒するといっても、こんなにも時間がかかり、しかも確実性のない話では、現代の人たちは到底耐えられないだろう。

ところがここで、高い世界に存在している神聖なエネルギーが、わたしたちに移入されたらどうだろうか。

当然、イダー・ピンガラー・スシュムナーの三管が速やかに浄化され、かつ、膨大なエネルギーが注がれることによって、クンダリニーの覚醒は飛躍的に促進されるはずである。

（関口野薔薇）

（以上引用文献／前掲のとおり）

そしてその技法が、「イニシエーション」と呼ばれるものなのだ。

これまでの体験談の中で度々出てきた「イニシエーション」とは、このことを指しているのである。

適切な指導者のもとで修行すること、そしてイニシエーションを受けること――この二つの条件がそろって初めて、わたしたちは、安全かつ迅速にクンダリニーを覚醒させることができ、その後のプロセスもスムーズに進めていくことで、多大な恩恵を享受することができるのである。

《体験談》教義の実践で、様々な体験や願望成就が

（Vさん　出家者）

ＡＬＥＰＨには、解脱へ至る道を指し示す教義と修行法があり、加えて、それを実践して解脱を果たした成就者や、その途中の段階を歩むそれぞれのステージの修行者も存在しています。

そして、その修行者たちは皆、様々な体験をしているのです。わたしもまた、様々な体験をしてきました。

入会した際に参加したセミナーでは、クンダリニーが覚醒し、様々な光やチャクラを見る体験をしました。その後、バクティという徳を積む行ないに参加するようになると、まるで嘘のように、

〝ツキ〟に恵まれるようになりました。

そして「願望成就の○○」と会員仲間にあだ名を付けられるくらい、考えたことがすぐ現実にかなうようになったのです。

また、セミナーに参加すると、いくつかの神々の世界を経験するようになりました。

出家してからも様々な経験をしてきましたが、解脱を経験し、悟りも経験し、また、自分自身の過去世もいくつか思い出すようになりました。

世間では「ソウルメイト」という言葉がはやっているようですが、わたしも過去世を思い出すことによって、周囲の人たちの中に、過去世で仲間だった人、兄弟だった人、恋人だった人等、深い縁で結ばれている人が多数いたことを知ったのです。

また、修行が進むにつれ、様々な神通力の経験をするようになりました。挙げればきりがありません。

このような体験、「わたしには無理だ」と考えている人もいるかと思いますが、その点は心配ありません。なぜならALEPHには、修行の機根のない人でも一気に修行を進めることができる、イニシエーションがあるからです。

コラム Column

クンダリニー覚醒後に欠かせないもの――「功徳」

クンダリニーの覚醒に当たって、もう一つ、気を付けておかなければならないことがある。それは、クンダリニーが覚醒したのちに、その超人的なパワーを支えるだけのエネルギーがなければならない、ということだ。

そのエネルギーのことを「功徳」という。

功徳とは善性のエネルギーのことで、その人の心を軽く明るくし、高い世界へと導く働きがある。エゴから離れた善い行為をなすことで、その人の内側に蓄積されていく。

クンダリニーを覚醒させると、わたしたちの意識は、アストラル世界やコーザル世界へとつながるようになる。

ところが、このときに功徳がなければ、苦しみ多き低い世界へと入っていく。そして、いわゆる「憑依（ひょうい）」されたかのような世界とつながってしまったり、気味の悪い体験ばかりが生じたりすることにもなる。こうなれば人生は真っ暗だ。この状態を「魔境」という。

逆に功徳に満ちあふれていれば、自分にとってプラスとなる高い世界の経験ができるのである。それは、神聖で崇高な素晴らしい体験となるに違いない。

したがって、クンダリニーを覚醒させて幸福になりたいならば、功徳を積む実践を怠ってはならないのである。

【体験談】

解脱を目指し、多くの人たちがステージアップ！

1 クンダリニーの上昇と甘露の体験――エクスタシーから至福へ

寝入りばなの体験が劇的に変化！

わたしは入会前から低級霊域の体験を頻繁にしていて、二日に一度は金縛りに遭い、恐ろしい思いをしていました。

寝ようとすると体が動かなくなり、だれかに首を絞められ、呼吸困難になります。

その後は、兵隊が部屋の中を行進していたり、座敷わらしみたいな笑い声がこだましていたり、円盤が飛んできて自分の体にぶつかってきたりと、とにかくいつも悲惨な目に遭っていました。

そういうことが何年も続いていたのです。

ところが、ＡＬＥＰＨに入会してから、そのような体験が激減し、クンダリニー覚醒後は、気持ちのいい体験を多くするようになりました。

あるとき、寝ていると、下から丸い球が何度も何度も体の中を上昇してきて、ものすごい快感を

（名古屋　Ｙさん　女性　二十代）

感じました。「もう止まってください！」と思うほど、強烈な快感でした。

後に師の方にお伺いしたところ、悦の体験ではないかということでした。悦は最高のエクスタシーといわれていますが、まさしくそのような体験でした。

寝入りばなはいつも怖かったのですが、これを機に恐怖がなくなりました。

この世で最高の快感！――悦の体験

クンダリニーが覚醒してから数年後、悦の体験が始まりました。

最初は、極限の立位礼拝の修行をしているとき、全身が何とも言えない気持ち良さで満たされる感覚が出てきたのです。頭もとてもクリアーで、意識が広がっていて、すっかり満たされた喜びに浸りながら、これは悦ではないだろうかと思いました。

さらに修行を進めていく中で、ヴァヤヴィヤ・クンバカ・ブラーナーヤーマをしているときに、全身がしびれるような喜悦（きえつ）が生じるようになりました。最近では、ヴァヤヴィヤをやると、出入息のときから身体が快感状態になります。調子がいいと、身体が強くしびれて、何とも言えない、この世の最高の快感ではないかと思うほどの快感状態が、一息ごとにやってくるのです。

スヴァディスターナ・チャクラから強くエネルギーが上昇しているのが実感できるとき、口の中

（Ｎさん　出家者）

もしびれて甘くなることが多いのです。「ああ、昇華された性エネルギーって甘いんだあ」とよく思います。

数日の集中的な修行に入った場合は、さらに全身、これ以上にないような快感を伴う至福が何度も何度もやってきます。身体が痛いほどしびれるのですが、その痛みが緩んでいくときの気持ち良さは、性的な快感とは比較にならないほど強く、しかも長く続きます。

その上、悦の状態のあとは、心がとても満たされ、頭の中がものすごくすっきりしています。この喜悦の絶頂の状態になると、頭の中が透明になったような状態で、意識が広がり、肉体から解放されたような状態で、瞑想に集中することができます。この悦の素晴らしい快感に浸るとき、「修行して本当に素晴らしい。修行していて本当によかった」という思いが心からわき上がってきます。

多くの人に、この至福と内的歓喜を体験してほしいです。そうすれば、「わたしたちの内側には素晴らしい歓喜があり、それは、外側の喜び、煩悩を満たす喜びよりずっとずっと素晴らしいものなんだ」ということを実感し、真の幸福を得ることができると思うからです。

極限状態で甘露が――エクスタシーを超えた至福感　（名古屋　Mさん　女性　三十代）

極限でバクティをやっていて「もう意識がなくなりかける」というときに、よく甘露が落ちます。

「グルが助けてくださったんだ」と、よく思います。

感動したのは、アナハタ・チャクラまで甘露が落ちてきたとき。今生経験したことのないほどの歓喜状態になりました。エクスタシーを超えた状態、説明できないほどの幸福な状態でした。

甘露は、自分でコントロールして落とすことはできませんが、バクティを頑張ってふらふらになったとき、グルが〝ご褒美(ほうび)〟として与えてくださるようです。

熱、ダルドリー、クンダリニーの霊視、そして甘露へ　（大阪　Hさん　女性　三十代）

クンダリニーが覚醒してから、修行を進めていきました。ヴァヤヴィヤ・クンバカ・ブラーナーヤーマを日々行なっていると、まずは熱のクンダリニーを体験し、体中が熱くなりエネルギッシュになりました。

そして、よくダルドリー・シッディが起こるようになり、次は、クンバカ中にアージュニァー・チャクラで、クンダリニーがサッと上昇するのが見えるようになっていました。

さらにどんどん修行していくと、今度はサハスラーラから冷たい甘露が落ちてくるようになりました。それがチャクラ（特にアナハタ）を通過するときには、何とも言えない気持ち良いしびれがあり、至福の気分を味わいます。

クンダリニーの覚醒で、自分がどんどん変わる

（札幌　Iさん　男性　四十代）

あこがれのクンダリニー。二十代そこそこで他宗教に出家したわたしの願いは、クンダリニーの覚醒でした。

ヨーガの本などで、クンダリニーの存在を知ったわたしは、同年代のお坊さんらと、クンダリニーの話に夢中でした。

インドへ行く決意を固めていた矢先、先輩僧などの勧めによって、幸運にもALEPHの門を叩くことができました。そこで類稀なグルに出会い、ほどなくしてクンダリニーを覚醒させることができたのです。

クンダリニーの覚醒は、まず過去の煩悩にまみれた自分をどんどん変えてくれました。

一日三食もりもり食べていた食欲が、二食、一食と減っていきました。あれだけとらわれていた異性に対しての興味や関心が、薄れていきました。

覚醒当初は、それくらいのものだったのですが、修行が進んでクンダリニーの覚醒が本格化した現在は、覚醒当時の比ではありません。

禁欲をすることに対する喜び――射精どころか、夢にも性的なイメージが出てくることはありません。夢の中でもヴァジラを片手に、秘儀瞑想や真理施をしている状態です。

またグルや真理、そして救済のこと以外、頭に浮かぶことはありません。また思索に対しても、クンダリニーが上昇し、サハスラーラから答えが生じるような感覚になっています。

特に真理施をしていて、救済を意識しますと、クンダリニーで頭蓋骨が強烈に振動し、神聖な意識と共に至福感に入るので、真理施している相手の中には、身体が熱くなったり、感涙したりする方もいらっしゃいます。

また、真理施を受けた側から、「酒、タバコ等がやめられた」「煩悩が減少した」など多くの声を聞くたびに、グルのエネルギーであるクンダリニーは、救済に本当に役立つと感じています。

またアシュヴィニー・ムドラー（※行法の一つ）を実践したり、ちょっとクンバカしたりするだけで、クンダリニーが上昇し、甘露は毎日落ちる状態で、個人のステージにおいても大変利益を与えてくれます。

そのため、人間界に対する興味ゼロで、グルと救済以外に興味なしという意識が形成され、魂の進化に喜びを感じています。

また、夢見のヨーガでは、自分のつくったアストラル世界へ何度も入って楽しんだり、気に入らない世界は、ヴィジョンをつくり替えて飛び込んだりしています。

また、眠りに入る状態で、視界に光が差し込んでくる等の体験なども始まっています。

もうクンダリニーは、上がらないときの方が少なくなってきている感じで、頭だけが熱い状態が

続いています。本当にクンダリニーの覚醒は、神への道の第一歩であると感じざるを得ません。

クンダリニーの覚醒の難しさは、他宗教のころからの様々な知識で知っておりました。三悪趣のけがれにまみれたわたしを変えてくださった、グルの深い愛と哀れみに、心からの感謝の念でいっぱいです。

2 サマディ——瞑想の究極の状態

呼吸が止まり、サマディへ

（Mさん　出家者）

クンダリニー・ヨーガの成就のための修行に入っていたある時期、わたしは一日の半分を、教団施設周囲の警備のワークに就いていました。

ある日、担当の警備ボックスに入っていると、急に激しい睡魔が襲ってきました。わたしは睡魔と必死に闘っていましたが、いつしかうたた寝の状態に入ってしまいました。

ところが突然、バチッと、自分の内側のアストラルに変化が生じた感覚があったのです。その瞬間、肉体は眠っているのに、意識が非常にクリアで、完全に醒めた状態になりました。

そんな肉体と意識が分離した状態にびっくりしていると、今度は、突然、ガチッと肉体が固定され、全く身動きが取れなくなってしまいました。

それは、周りから体を押さえられて身動きが取れないというよりは、突然肉体が硬直し、すべての運動神経のブレーカーが一気に落ちてしまったように、瞬時に身体の機能が一斉に停止してしまったようでした。

相次ぐ自分の肉体に起こる事態に驚いていると、今度は、さらに自分の意思とは無関係に、勝手に呼吸が徐々に、一呼吸、一呼吸、間隔がゆっくりと長く開き出したのです。

「まずい、このままだと呼吸が止まってしまう！」

慌てて必死に呼吸をしようとするのですが、しかし、まるで機械のように、自分の意思とは反対に呼吸の間隔は徐々に徐々に開いていき、そして「フゥー」とゆっくりと息を吐いたのを最後に、ついにわたしの呼吸は完全に止まってしまったのです。

わたしは非常に重要な場所の警備のワークの最中だったので、何とか早く、この自分に起こっている事態から抜け出そうと、動かぬ体の中で必死にもがいていました。しかし、動くのは唯一思考のみで、肉体の方はまるで死体か石のように、ピクリとも動かすことができなかったのです。

その状態は数分間にわたって続いたのですが、必死になってその状態から抜け出そうともがいていると、ある瞬間、フッと肉体の固定が解け、やっと身体の自由が戻ったのでした。

この体験は、仏教では「サマディ」、一般には「三昧」と呼ばれるもので、非常に深い瞑想状態に入ったときに体験できる状態といわれています。

このときは、ワークの最中に勝手にこのような状態に入ってしまったため、強引に中断せざるを得なかったのですが、修行の時間であったなら、さらに深い次の瞑想段階へと経験を深めていくチャンスだっただけに、非常にもったいない体験でした。

立位礼拝中に第三静慮（だいさんじょうりょ）——アストラル、コーザルを経験

アヴェッチャパサーダ
ヴァンティー師　成就者

一九九七年ごろ、女性の師ばかりを集めての立位礼拝修行がありました。最初の四日間は通常の定期修行で、そこから立位礼拝一色のメニューに移行していきました。

始めてすぐに悦・喜・軽安を体験し、ほとんど楽（第三静慮（※サマディには四段階あり、そのうちの第三段階目））の状態で立位礼拝を続けることができました。その間はずっと意識が連続していたため、シャヴァ・アーサナも取らず、最後まで究竟の瞑想で通しました。

礼拝中は相当に深い意識に入っていたようで、時間がとても短く感じました。意識がものすごく遠いところから現象界に戻ってきたと思ったら、まだそこはアストラル世界でした。祭壇を見ると、

上に立位礼拝の詞章が三枚、クリアパック（一・五メートル×一メートルくらいの大きさ）に入れられて、輝いているのが見えました。

このことに気付いたとき、それまではコーザルに入っていたのだということがわかりました。長時間の立位礼拝にもかかわらず非常に短く感じたのは、そのためでした。

また、このとき、自分の唱えている詞章が確実にアストラルに形として残っているのだということを、確信しました。それが祭壇上の、クリアパックに入れられた三枚の詞章だったのです。

正語の実践をしないで、けがれた言葉や間違った言葉を発していたなら、それがアストラルに確実に形となって蓄積されていって、大変なことになるんだということも、よくわかりました。

3　六ヨーガの体験が次々と

バルドのヨーガで人間界を経験

一九九二年の四月ごろから一年間、経行教学（きんひんきょうがく）の修行に入りました。この修行中、激しいトゥモの体験をしました。

——（Sさん　出家者）

そして、ある日のシャヴァ・アーサナの時間、ふと気が付くと――自分では普段の表層意識の状態だと思ったのですが――意識が肉体から離れているような感じになり、アストラル体がわたしの意志とは関係なく頭の方から抜けて、移動を始めました。

そして、上にも下にも行かず平行に真っ暗な中を移動すると、やがて先の方に丸い出口が見えてきたため、自分が暗い筒、トンネルのような中を通っているということがわかりました。

そのトンネルから出ると、そこは今と同じ人間界でした。周りを見ると、道路にＡＬＥＰＨのバクティの車が止まっていたので、わたしは「変な世界で迷子にならなくてよかった」と思い、そのバクティの車で道場に戻ろうと思いました。

後でそれがバルドのヨーガだったと知り、真っ暗な中を移動しているときに上がりもし下がりもしなかったのは、行った世界が今と全く変わらない人間界だったからか、と納得しました。

最近では、意識を保ったままアストラル体が移動を始め、空間を通り抜けていくとき、頭頂にグルを意識していると、その世界が消えてしまい、上方から光が見えてきて、その光に向かって飛んでいくという体験をしました。

ワーク中や修行中に、夢見や幻身の体験が頻繁に

（Tさん　出家者）

わたしの幻身と夢見の体験は、出家してから、あるときは修行中、あるときは極限のワーク中に起きるようなりました。

最初は、出家して一カ月後に行なわれた、毎日十六時間にわたる立位礼拝の修行でのことです。礼拝の合間にあるビデオ教学中に、自分の周りが道場と違う別の空間になってしまった、ということがありました。

その後何年かして、ワークをしているときや集中修行に入っているときに、夢見のヨーガのちょっとした体験が時々起こるようになりました。

そのころは、特に霊的体験が頻繁に起こっていたのですが、ワークを終えてシャヴァ・アーサナを取ると、体がしびれてきて、普段の意識が途切れることなく、夢の世界へと入っていくようになりました。そこでは、「自分は夢を見ている」という意識がはっきりとあるため、好きなことができました。

夢の中では、「なるべく深い意識の中で修行しよう」と思って立位礼拝をしたり、寝る前に、「今日の夢ではこれを唱えよう」と決めておいたマントラの修行をしたりしました。

また、夢の世界を、礼拝やマントラの修行で別の空間に変えたりもしました。その中には、天を

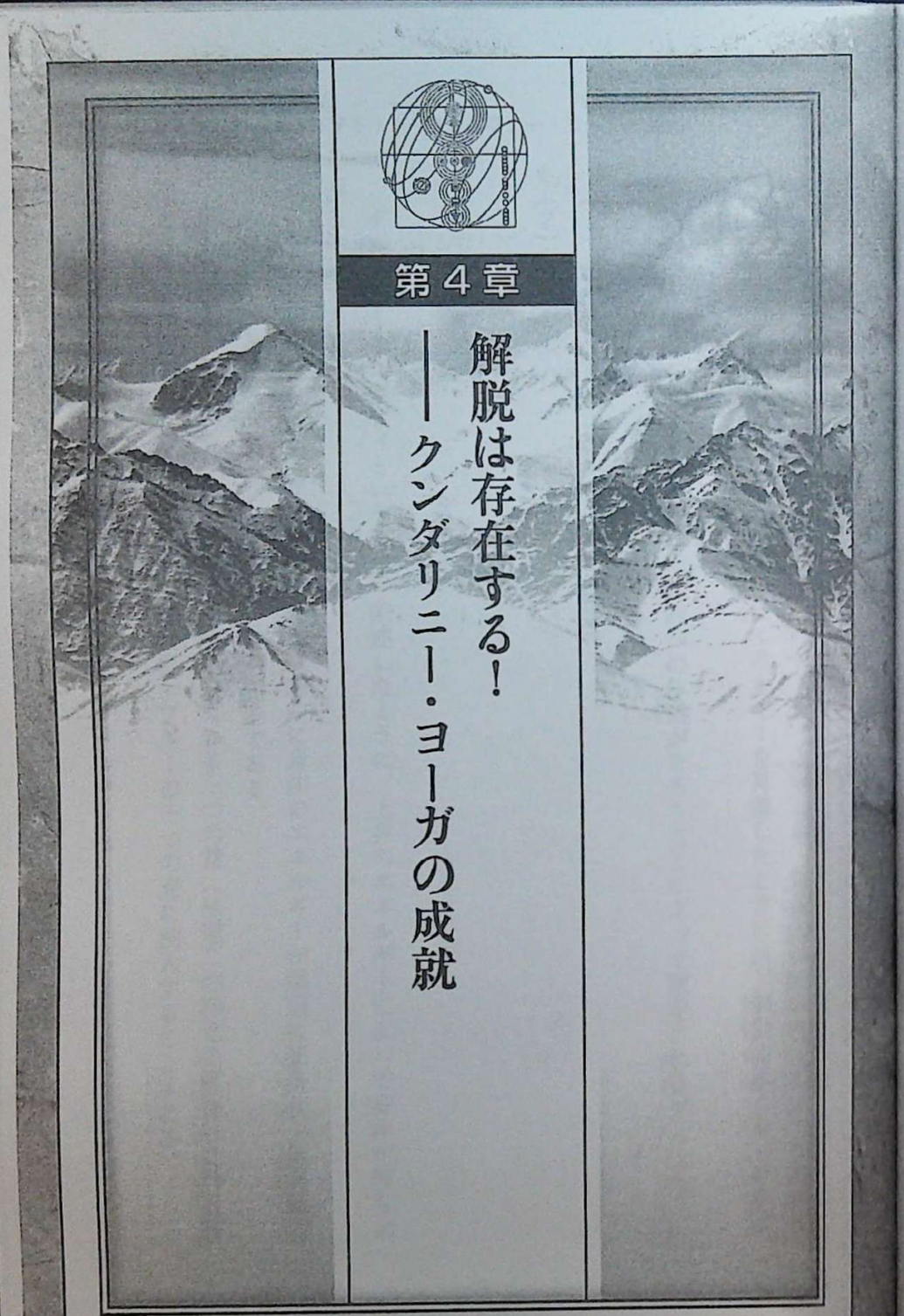
舞ったり、低級霊域に入ってしまったりといった、この世界と違う世界の経験もありました。

眠りから覚めるときも、意識は途切れることなく戻ってきました。そこから「再び夢の世界に戻ろう」と思うと、また入っていくこともできましたので、それを何度か繰り返して夢を楽しむこともありました。

そのときは、夢に入っていくだけではなく、通常の意識のまま、目をつむるだけで別の空間が見えたり、別の空間になったりしました。

例えば、目をつむると周りが海になり、そこに自分が浮いている状態、目を開けると元の世界、また目をつむれば周りが海、といった感じです。またあるときは、目を開けた状態で、目の前の風景にダブってアストラルの人間界が見えたりもしました。

サマナ生活で極限のワークをし、功徳を積ませていただいているだけで、修行中などに様々な体験が起きるようになっています。



第4章

解脱は存在する！
――クンダリニー・ヨーガの成就